

論文審査の結果の要旨

氏名：古 畑 雅 一

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：出生時低体重の小児気管支喘息の発症への影響に関する研究

審査委員：（主査） 教授 根 東 義 明

（副査） 教授 早 川 智 教授 橋 本 修

教授 越 永 従 道

本研究は、厚生労働省が実施した経時的な 21 世紀出生時縦断調査の結果を分析することにより、本邦における小児気管支喘息の発症と出生時低体重・早産との深い関係性を示した疫学研究である。

2001 年 1 月 10 日から 17 日及び 7 月 10 日から 17 日までの全出生児を対象として、厚生労働省による第 1 回から 10 回までの 21 世紀出生児縦断調査と人口動態調査の出生関連結果データを結合し、新たなデータセットを生成することにより、喘息受診状況に与える出生時体重、在胎週数、性別、両親の喫煙、学歴等の影響を多重ロジスティック回帰分析により解析した。

喘息による通院受診率は 5.5 歳でピークを迎えるのに対し、入院受診率のそれが 2.5 歳だった。また、10 歳時の通院による累積受診率は男児が 22.0%、女児が 15.5%だった。

多重ロジスティック回帰分析の結果により、いくつかのオッズ比の有意に高い説明変数が明らかとなった。それらは高い方から順に、通院では男児・出生時低体重・世帯の低収入・母親の喫煙習慣だった。入院については順に男児・早期産・第二子以降・母親の喫煙習慣・母親の低年齢・出生時低体重・郡部居住だった。

これまで、男児に加えて母親の喫煙および低年齢が喘息による通院及び入院のリスクファクターであることが知られていた。しかし、これらの知見に対して、本研究は、出生時低体重および早期産が母親の 2 つの因子よりも強い、男児に次ぐ喘息のリスクファクターであることを新たに明らかにした。

近年、我が国では低出生体重児が増加傾向にあり、本研究の研究成果である出生時低体重および早期産と喘息との関係性に関する本研究の成果は、重要な意義を持つものといえる。また、これまでの研究では前例のない膨大な全国データベースをもとに、小児期における喘息発症の新たなリスクファクターの存在を明らかにした点においても本研究は優れている。

本研究の成果は、今後の喘息の発症要因に関する医学・医療研究への大きな貢献度となるものと期待される。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 30 年 2 月 28 日